
桜色の闇

香住

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色の闇

【Nコード】

N0996H

【作者名】

香住

【あらすじ】

満開に咲く桜の花は、いつも私を押しつぶす。息苦しく咲き乱れる桃色の罨——そんな感情はきっと誰にも理解されないと思っていた。あの日、彼に逢うまでは。

01：ランチタイム

満開の桜は、あんまり好きじゃない。見上げると桃色に圧迫されそうになる。

息が詰まりそうなほど密着して咲き誇る桜。

そんなにいっぱい咲いてどうするのだろうか？
ほんの僅かな期間、力いっぱい花びらを開こうとするその意志が、私にとっては息苦しいのかもしれない。

「乃里子、またぼんやりしてる」

「またア？」

ひらひら、と目の前に白い掌が揺れた。

「……何？」

「今日はなに考えてたの？」

首を傾げると、彼女の栗色の髪がさらっと滑る。妙な話だけど結衣のその髪を見るといつも触りたくなって困る。……思っ三回に一度は、实际行动に移してはいるんだけど。

それでも『変わったコ』と気に入ってくれているのが救いだ。時々こうして、言葉に結びつけるための切欠もくれる。

「一生懸命さって、息苦しいのになって」

「……また独特だねエ、乃里子節」

結衣の隣、短く切った髪をかきあげてなづきが呆れたように息をつく。こちらは敢然たる現実主義だ。率直な言い口が悪気も後腐れも感じさせない。

「あら、いいじゃない、あたし好きよ？」

「私にや理解不能。さて、昼休みはあと十分、戻るかい、お二方」
ベンチから立ち上がった制服のスカートを払い、なづきが私たちを見下ろした。いや、彼女にはいつも見下ろされているのだけれど、でもベンチで見上げると、なづきの向こう側の太陽が彼女を照らして、明るい茶色の髪が金色に透けて見える。結衣も同じだったらしく、嬉しそうに言った。

「なづき、またカラー入れた？ すっごく金色に見えるね」

「ん、ああ、ちょっと明るすぎるかと思っただけだよ」

そんな会話をしながらつまらない四角いオフィスへ戻る二人の後姿を見つめ、私は最後の一瞥のつもりで桃色の天井を見上げる。

息苦しさは変わらない。一生懸命咲こうとしているのはよくわかったわ。でもね――

桜の花でさえあんなに命を生きようとしているのに、という後ろめたさがあるのだろうか？

「乃ー里ー子ー！ 置いていくよー？」

前方を歩く結衣が振り返り、叫ぶ。隣のなづきは面倒臭そうに髪に手をやって――それが彼女の癖なのだけど――ちらりと私を見ていた。

足を早めて二人に追いつくと、結衣がにっこり微笑む。

「明日もいい天気だったら、またここでランチにしましょ？ ね？」

時計は十二時五十五分。

02：アフターファイブ

普段、ほとんど残業するということはない。ナインツーフাইブの世界。それでいいと思っている。私も雇い主も、だ。

だからこんなことは入社以来のハプニングだ。

何があつたのかなんて、下っ端OLには知らされないことが日常茶飯事。だからただ、指示されたことを従順な犬のようにこなしていく、だけ。

私は正直、半分面白がつていた。普段五時のチャイムと共に逃げるこの四角いオフィスからは見えなかった、オレンジの空や掃除のオバサンや蒼く染まる空が物珍しかったのも、あるけれど。

だから会社を出てからも私の足取りは軽かった。

時計は二十時十五分。まだ風はそんなに冷たくはない。

風に攫われて桃色の欠片がひらりと、私の髪に触れてきた。

——まだやっぱり、力いっぱい咲いているのかな。それともしかして……？

妙な期待感を持って、私は遠回りのルートを選ぶ。昼休みも通った道は、当たり前だけど昼間の顔とは違う。すれ違うカップルは腕を組んで睦まじそうに、疲れて歩くサラリーマンは家路を急ぐのだろうか。

大きく逸れた道は、公園へと続く。

昼間、太陽の下で抗うように咲き誇っていた桜は、漆黒の空を背にしてみると妙に頼りなげに見えた。それでもやっぱり、ある程度の息苦しさは否めない。

どつしりと自信を持って咲き誇っていたのはまた違う、儚げながらもしなやかな強さを感じられる。

ああ、やっぱり、ダメなのかな。

こんな風にがんばって生きなきゃいけないのかな。

桜の花に競争心を抱くなんて、きっと結衣やなづきが聞いたら笑うだろう。いや、結衣はかえって面白がるかもしれない。

『またいつもの乃里子節？』って、くすくすって。栗色の髪が風になびいて。

そうか、私、もしかしたら羨ましいのかな。

そこまではたと考えてから、思った。

何が羨ましいんだろう。結衣が？ 長い髪が？ 茶色の髪が？ それとも一生懸命生きる桜が？

桃色の天井はあやしげに漆黒の着物をまとって私を見下ろしていた。

03：エスケープ

急に、泣きたいと思った。

その桃色は何もものを言わなかったけれど、どこかじわじわと私に何かを迫っているような、そんな気がして。

どうにか理性が生き返る。

気持ちのよい夜の一角は、まだ眠っていない。穏やかな気温もあいまってか、あちこちでざわざわと酔客の声や匂いが流れてくるせいもあって、私の理性は涙を拒んだ。

幼い女の子ならここで泣いていてもおかしくないのにな、とそれを年齢のせいに見てみる。

正直、理由がない涙を流すことは気持ちよさそうで、その誘惑と戦いつつ私はゆっくりと公園の中ほどへと足を進める。騒ぎ声はところどころで火柱のように急に上がり、しゅんと醒めていく。

最初耳障りだと思っていた騒がしさも、それを考えると少し面白い。

私の足は記憶を辿り、人のいなさそうな方角を選ぶ。

大通りへ続く道はシートを広げた集団や、帰宅途中の寄り道組で人の気配は絶えない。もっと奥のほうにそういえば、ちよつとした広場があつたんじゃないか。たつたつ。

そうだ、あそこなら泣いていてもおかしくないかもしれない程度の人通りだろう。

泣く為の場所を探すと言う妙な行為を、私は桜の花のしたでいそいそと実行していた。

その間、天井の色が何色かを見定める余裕はなく。

「……ああ」

溜息のようにそんな声が漏れた。

想像どおり、奥まった一角は人影がまばらで、いい具合に照明の数も少ない。そのくせ桜の木はぽつんぽつん程度に配されていて、まさに絶妙だった。

手近な一本に近づくと、最初おおらかに微笑んでくれていたような桃色の塊がその気配を細やかに散らせ、ひとつひとつの花の息吹が聞こえるような気がしてくる。

そうだ、それが苦しいのかもしれない。ちいさな生きものが必死に生きている様。

私は後ろめたいのかもしれない。桜の花よりも大きな図体をしていながら不器用に、咲かせる花のひとつすらなく、それ以前に主目的さえもない自分が。

ゆっくりとその幹を撫でながらやっと、ぽつり涙を零した。

04：パッション

植物からは温度は感じられなかった。それがまた拒絶されたような気がして涙を零れさせる。

感情が揺らめく。何だかわからない焦燥感。自分でも、何をしたいのか、何が哀しいのか、もしくは淋しいのか辛いのか、理由がわからない。でもただ今はここにこうして居て、泣いていたいと思うだけで。

ガコン、と鈍い音が斜め前方から聞こえた。

半分現実に取り戻された私は何故かそれに惹き付けられるように幹から離れ、音を確認かめるべく歩む。音の原因は、地面に転がった缶ビール。苦しげに白い泡を吐いている。

「落としたの？」

常識から考えればその問いかけは唐突だろう。初対面の人にいきなり言う科白ではないはずだ。

転がった銀色の缶から彼は視線を私に動かす。笑おうか、と迷う一瞬はすぐに過ぎて、私はそのまま彼を見つめた。戸惑うような、そしてやっぱり私と同様、わからない表情で。

二度ほど大きく瞬きをして、私は頭を屈めて缶を見やった。無機質なその色合いが妙に異質だ。吹いている泡は苦しみの象徴のようにも見える。

ゆっくり向き直り、まだ戸惑いの表情のままの彼に同じ科白を告げた。

「落としたの？」

缶を、というよりもそれを落とすに至った経緯を、心の揺れを聞きたいと思った。彼の視線は数度揺れて、そして低い声で言った。

「泣いてるのか？」

自分でも、妙な会話をしていると思わなくはない。結衣なら必ず言うだろう。でもその時の彼の言葉はすんなりと私の心の言葉を紡ぐ。

一瞬驚いたものの私は表情を変えずに桜の天井を見上げ、紡がれた言葉を口にした。――ほぼ無意識に。

「とっても私、後ろめたくて――息苦しいの」

そしてその時にわかったのだ。私はそれを望んでいるんだと。後ろめたい思いをしたい。誰かに背中を押されたい、と。桜の花にそれを求めていたのかもしれない。

苦痛というよりは切ない欲望に、私は表情を歪めた。

05：リアリズム

見上げた桜は、やはりどこか威圧感があつて、また涙が溢れそうになった。——いけない、ひとがいるのに。

「息苦しい……？」

掠れるような声が耳にやっと届いた。単なる私の言葉の反響なのだろうか？ そう思いつつ、ゆつくりと言葉を紡いだ。

「——そう。息苦しいの。まるで急き立てられてるみたいに」

言いながら、私はゆつくり彼の方を見る。さっきと同じ姿勢で、何故か途方にくれたように立っている。

そうよね、いきなりこんなこと言っても普通は付いてこられないもう慣れた、という結衣でさえも、最初は戸惑っていた。

彼を見つめながら、私はその向こうに夥しい数の『普通の人』を見ていた。自分は彼らとは異質なのだろうか、と時々——いや、よく思う。結衣やなづきもまだ『向こう側』だ。そう、きつと彼も同じ。

そう考えると私は少し安堵する。まさか分かり合えるような人間がいるとは思わない。いやむしろいい。いないのが私にとってデフォルトの世の中なのだから。

肩の荷が下りたような気がして、私はふと苦笑を浮かべる。

「変よね。桜の花は何も言わないのに——」

そうだ。わかってくれる人などいないのに。彼だって、たまたまここで缶ビールを——きつと酔いの所為で取り落としたに過ぎないのに。

彼はじつと私を見ていた。なにか違うものを見ているような、そんな眼差しで。そしてその瞳にやっと現実を取り戻すと、言ったのだ。

「そんなこと——！」

『そんなこと』？

私は笑みを消して彼を見つめる。『そんなこと』——どうだというのだろう。まさか。思い浮かんだ想像——いや、願望を自ら打ち消して、私は孤独を守る。

しかし彼は続けた。

「ない……かもしれない。少なくとも。いや、俺は——」

「優しいんだ」

半ば拗ね気味に言った、といっても過言ではないかもしれない。そんな風にわかる人がいるはずがない。そんな思い込み。そうだ、わかるはずがない。わかってたまるものか。きっと彼はただ口裏を合わせているだけで。

それでも私は、彼に言っていた。

「ありがとう」

まっすぐに見つめながら、口先だけでもいい、わかってくれるフリだけでもいい。それがもしかしたら救いかもしれない、と私は気づかぬうちにぼろりと涙を一粒、零していた。

06：リターンズ

私はそのままゆっくりと彼に背を向けて歩き出した。

ありがたかった。もしも彼が私に話を合わせたのだとしても、それでもありがたかった。少なくとも言下に否定しなかったという点において。

「——あの！」

視線を感じていた背中に、今度は声が届く。焦るような高さの混じった声。反応しそうになるのを留めて、ゆっくりとした足取りのままでは彼から遠ざかりつつあった。

気持ちにはさくれ立っている。彼にまだ、缶ビールを取り落とし、理由を聞いていない。それが私の望む答えなのかどうかはもう、永遠にわからなくなってしまう。

「俺——俺、あんたの気持ち、多分わかる」

急に、現実引き戻される気がした。たとえば言うなら幽体離脱した瞬間に足を引っ張られるようなイメージ。そして現実、私の足は歩みを止めた。

「桜……綺麗だけど、息苦しい。なんつか、あの……うまく言えないけど、圧迫されるようなそんな感じで——」

すらすらと彼が答えたのだとしたら、かえって私は信用しなかっただろう。どもりながら説明するその口調に、彼が私同様説明のつかない気持ちを抱いているのだ、というのがわかった。

どうしてだろう。どうして彼にはわかるのだろう。

ゆっくり私は振り向く。何故、を瞳に抱いたままなのには私は気付かない。振り返って視線が合うと、彼は一瞬身体を固くする。それから——なんとも言えない光がその目に宿る。

「あんだ……昼もこれを見上げてた……」

妙な眼の色で私を見て、彼はそう言った。私は射抜かれたように彼を見ていた。何故？がますます私の心を支配する。

彼の瞳はやつと居場所を取り戻したように私の視線を正面から受けた。そして今度は落ち着いた声音でゆっくりと言う。

「桜の花が、好きじゃないのか？」

当然の問いだった。でも、誰も私に聞いてくれたことはない。私はふつと瞳から力を抜いて、そしてどう答えようか迷わせて、ずっと眼を伏せる。

「わからない。好きだけど、苦しいわ」

そんな言葉で、彼が納得してくれるのかどうか私にはわからないけれど、でも、それが精一杯だった。

07：リアルノイズ

ザッ、と足音が近づいて。そして気付いた時には背中に腕が回っていた。抱きしめられる、よりも柔らかな感覚。守られているような、理解されているような、そんな錯覚を覚える。

普通に考えればおかしい。私は彼とろくな会話をしていないのに。なのにどうして彼は私がわかるのだらう。望んでいたことが。それで確実に慰められることが。

欲望のない抱擁はどこまでも温かで、私にとっては贅沢なものだった。

その腕に緊張が走ったのはどのくらい経ったことだらう。微かに込められた力を、私は最初誤解していた。

彼はゆっくりと腕を解き、それから多分私を見たのだと思う。――私はずっと顔を上げなかったから。そして喉から引き剥がすような声で言った。

「明日、またここに居る」

その声にさえ、頷くことも首を振ることも、また顔を上げることも出来なかった。

何故だろう？ 確実に温められたはずの心はそれをさせなかった。だから彼がどんな顔をしたのかわからない。もしかしたら眉を顰めたのかもしれない。

でも私は頑なにそのままだった。何かを口に出してしまうと、身体を動かしてしまうと壊れてしまいそうな気がしたからだ。

足音が遠ざかる音と、気配が変わる感覚がして私が顔を上げたと

きには、彼の姿がちょうど植え込みに消えるところだった。

そうか、現実に戻っていったんだ。

その向こうで微かに聞こえる声を、私は聞かないように背を向けて歩き出した。どこことなくまだ、彼の抱擁が残っているような感覚で。

翌日、お約束のように「眠れなかった」なんてことはなく、私はいつもの時間に眠っていつもの時間に起き出した。いつもと違うことといえば……微かに雨が降っていることだろうか。

「残念ねえ、これで散っちゃわないかなー」

長い髪からいい香りをさせて、結衣が私の耳に唇を寄せる。そのピンク色にどきりとするのはきつと、私だけじゃないはず。

でもその視線の先は窓から見える公園のピンク色に注がれたままだ。

「まだヘーキっしょ。それよか乃里子、昨日残業だったんだって？ お疲れさん」

なづきが言って軽く肩に触れる。そういえば彼女はスキンシップが好きなのか、よく小突いたり掴んだり、飲んだあとは私を抱きしめて喚いたりする。

「ねえ、どういうときに抱きしめる？」

唐突な私の質問に、なづきは一瞬瞠目する。まだ慣れていないのだ。結衣は逆に待ってましたとばかりににっこりと微笑んで頬杖をついた。

「そうね、相手がいとおしくなったときかしら？」

「いとおしいって？ 性欲ってこと？」

「……ストレートだねえ」

前髪をかきあげながらなづきがちらりと私を見た。

「違うの？」

そう訊ね返すと、なづきはぐつと顎を引いてそれから視線だけで結衣に助けを求めた。結衣が困った子供をあやすように溜息をつき、首を振る。髪も揺れる。

「そればかりじゃないわ。だってなづきもよく乃里子のこと、抱きしめるじゃない？」

「ちょ……！」

慌てたなづきが口を挟もうとするのを気にせず、うんうん、と私は頷いて真面目な顔で聞き入った。

「つまり、親愛の情ってことよ。あなたを好ましく思っています、っていう、ね」

「ふうん……」

彼はあの時私を好ましく思っていたのだろうか。会ったばかりで何を話したとも言えないような私を。

じゃあ私は彼をどう思っていたのだろうか？ 突然そうやって親愛を示した彼を。

答えは出なかった。ただ、嫌ではなかったことだけを思い出していただけで。

09：フラッシュバック

「あら乃里子、傘は？ 駅まで入ってく？」

「ううん、いいの」

定時きっかりに仕事を切り上げ、いつもどおりにビルを出る。結衣がピンク色の傘を広げて少し首を傾げるけれど、

「そう、じゃ、お先ね！」

と無邪気に笑って雨の中へ出て行った。

本当に、結衣のああいうところはすごいと思う。多分自分では理解してるとかそういう深いものはないんだ。ただ、そう感じるからしてるだけで。問質されない心地よさの所為で、私は結衣が好きだ。

雨の滴る灰色の空を見上げ、それから首を伸ばして公園の方角へ向けると、ばやけたようなピンク色の塊が見える。

しばし考えて、私はそのまま雨の中へ足を進めた。そんなに降っているわけではない。静かに泣いているようなそんな雨の中、ゆっくりと私は公園へと向かった。

彼は、いるのだろうか？ いや、いたとしても——会いに行ってしまうというのだろうか。名前さえ知らない相手だ。結衣の言葉を信じれば、『彼は私を好ましく思っている』ことになるのだろうか？

そう考えて、初めて私は視線を伏せた。半年前までに付き合っていたある男性のことを思い出したからだ。

あのひとはいい人だった。初めは私の突拍子もない話にびっくりしてはいたけれど、だんだん結衣と同じように聞いてくれるようになった。……最後には、眉を顰めて溜息をつくようになってしまったけれど。

『キミの考えてること、僕には到底理解不能だ。その話を聞いて僕はどうしたらいい?』

吐き出すように言ったその言葉は、私が幼い頃から良くぶつけられたものだった。最初はあんなに楽しそうだったのに。理解を示してくれていたのに。

同じ言葉が時を経るごとにどんどん違う捉えられ方をするのは、それこそ私には『理解不能』だ。

嫌なことを思い出した。足取りが重くなる。このまま私はどこに行こうというのだろう。彼に会いに行つて、どうしようというのだろう。今更また、誰かが理解してくれるかもしれないなんてそんな思いはもう――

諦めかけていたのに。

10:レインデー

ピンク色の塊へと足を進める私の視界に、その傘が最初に見えた。この状況では、ビニール傘以外は似合わないように見える。

彼が振り向いた。情性のように見えるその行動の先は、私を見て止まる。

「……どうして、また泣いてる？」

泣いてる？

その言葉を胸の中で繰り返した瞬間、涙粒が零れたのがわかった。私、なんで泣いてるんだろう。何が哀しいんだろう。淋しいんだろう。

しばしじつと彼を見つめてそんな自問自答をして——それから、ゆっくり頭を左右に振った。泣いている、わけじゃない。なんていうか……

うまく言葉に出来なくて、私はピンク色の天井を見上げた。灰色がかった空を従えて、どこか重く咲く桜の花。昨日みたいな誇らしげな様子はない。どこか重く、気だるく見える。

こんな花ならこうして見つめていても辛くないのにな、と妙に納得しかけた私の視界に、ふいに灰色がかったもうひとつのフィルタが差し込まれる。突然の視界の変化に瞬きをしつつ、そのフィルタがビニール傘であることを確認すると、私は彼を見る。

「ありがとう」

そんなに強く降っているわけではないけれど、しっとりと髪は濡

れているだろう。

私は短くお礼を言ってからまた、今度はフィルタ越しにピンクの天井を見上げた。

「居ると思わなかった」

「……俺も」

「そう？」

「ああ。来ると思わなかった」

これが多分、『普通の会話』っていうやつだろう。二度目でやっと、標準的になった。

妙に可笑しくて、私はくすりと笑う。

「なんか、変」

「……だな」

「そう思う？」

「ああ」

「変な人」

「……」

「ありがとう」

「何が？」

答えに詰まってしまふ。そんな風に純粹に聞かれたりしたら。

次の科白を言うまでに、随分と勇気が必要だった。

「わかる、って言うてくれて。嘘でも、嬉しかった」

嬉しかった。そう、嘘でもだ。真実でなくていい。

微笑みつつ視線を上げたけれど、また涙が零れるのが今度は自分でもわかった。何のための涙なのか、私にもわからない。

彼は黙っていた。嘘じゃなかった、って言って欲しかった気がした。——それが嘘でも、良かった。

11：ロンリネス

何故涙が零れるんだろう、といささか自分でも不思議な気分では黙っていた。彼は何も言わない。その気配が、言葉を探している風だった。

「……ごめん」

微かに聞こえてきたのは謝罪の言葉。その律儀さに私は少し可笑しくなった。

「いいの。ありがとう」

「いや、そうじゃなくて」

首を振ってそう答えると、彼は焦ったように言葉を被せる。それからまた、彼は言葉を探す。

繕う科白は欲しくなかった。だから——彼がどんな言葉を捜しているのか不安だった。出来れば今は何も言っただけでいい、と心の奥で願う私がいる。彼はわかっていてくれたんだ、という自己満足でも良かった。

でも、彼は探した拳句に唇を開いた。

「俺、わかるよ。あんたの気持ち」

慌てた風な彼の言葉をそれ以上続けさせたくなくて、私が制しよと上げた声、彼がフィと掌で止めた。

口を、つくむ。

「嘘じゃない。あんたに気を遣ってるわけでもない。——だってそうだろう？俺があんたに気を遣う必要なんてないわけ」

聞きたくなかった。言い訳に似た言葉は要らなかった。言われれば言われるほど淋しい気持ち暴走しそうになる。

でも、それは彼の所為じゃない。わかることが出来ないのを彼の所為にするのは――間違っている。

「そうね」

淋しい気持ちは細く長い溜息で逃がして、私は呟いた。彼から眼を逸らして灰色がかったピンクの塊へ視線を投げる。

「その通りだわ」

うまく気持ちを堪えることが出来たかどうか分からないけれど……

……眼を見てその言葉は、言えなかった。

淋しい、と思うのは何故なんだろう。彼が初めてというわけじゃない。というよりも、私をわかってくれる人のほうが少なかった。彼が私をわかってくれなかったからといって、淋しく思うのは間違っている。

彼の声が変わった。焦って探した言葉じゃなくて、感情を表すために言葉を探して。

「わかる、つつーのもオコガマシイかもしれないけど。あの夜、俺、多分あんたと同じ気持ちだった。夜に桜、見上げ――え？」

言葉の途中で私は彼の方へ向き直り、傘を差しかけてくれていた彼の手に、自分の手を触れる。その行動に驚いたように彼が言葉を切り、視線を私にくれて。

――あなたを好ましく思っています――

彼に近づきそしてかかとを上げて、唇に触れた。

12：ターンバック

「ど……うかしたの？」

給湯室に入ってきた結衣が私を見るなり、目を丸くしてそんな言葉
を吐いた。そしてつと掌を伸ばすと頬に触れ、親指がそつと左眼
の下を撫でる。ふわりと女の子の匂いがした。

「ん、なんかヘン？」

「目の下にこーんなクマ作って。『何かヘン』も何もないわよ、も
う！」

結衣の白くて細い指が――綺麗にピンクのマニキュアを重ねて塗
った指が数度、目の下を往復する。

「くすぐりたい」

「んもう……これじゃファンデでもカバーできないじゃない」

哀しそうに眉を寄せる結衣の手を、そつと外す。そして茶色の睫
が綺麗に上を向いている瞳に向かって、訊ねた。

「ねえ、キスって性欲？」

「の、乃里子……」

いつの間に来ていたのか、入口でなづきがその言葉を耳にしてが
つくりとうな垂れていた。結衣が振り返って「あら」と口の中で呟
いて微笑み、そして私を見る。

「そうねえ……挨拶でキスする人もいるわね」

「日本でも？」

「まあね。たまにいるわよ、挨拶代わりにキスする人」

「ふうん……じゃあ、特別じゃないんだ。結衣もする？」

なづきが溜息と一緒にポットに手をかける。

「今度は一体またどうしたんだろーねえ……」

黒いマグにインスタントコーヒーを振り入れて、ポットからお湯
を注ぐ手元を見ながらなづきはふうと息を吐く。

結衣は私の問いにまず首を振って答える。茶色の長い髪が揺れて、シャンプーの匂いが漂った。

「うっん、好きな人にじゃなきゃ出来ないわよ」

「へーえ？ 結衣のストライクゾーンなんてあつて無きモンと思つてたけど？」

「あ、そういう言い方ってないんじゃない？」

ズレた論議になっていく結衣となづきの会話を耳からシャットダウンする。挨拶代わり、とはちよつと違う。行動に裏打ちされる理由は今は見つからない。

彼はどう思つたんだろう。あのまま、瞠目したまま私を見ていた彼を傘ごと雨の公園に置き去りにしてきてしまった。背中から足音は聞こえなかった。

それが多分答えなんだろうけど。

13：ギルティ

四角いオフィスの窓から見下ろすピンクの塊はまだ、饒舌だ。今まで感じていた息苦しさとは違う、なんだか重苦しい気持ち占めている。元々心が快晴だったことのほうが少ない私でもこのどんより感は一足先に心だけ梅雨に入っただけのようだった。

終業後のエントランスを抜けると、迷う。通常、帰宅するためには最寄駅へ向かう為に左へ曲がる。右に曲がるとあの公園を通って遠回りして駅に着く。

一瞬の迷いで足を止めた私に、後ろから女の子の二人連れが甲高い笑い声を上げてスイッと追い抜いていった。その騒がしさに眉を顰め、反射的に逆方向の左に曲がる。

考えないようにしよう。そうだ、もうすぐ花も散る。そうすれば青々とした緑の柔らかさに心は和む筈だ。

そんな言い訳を私は三日、使いつづけた。

「ねえ今日のお昼、外行かない？ お弁当買って」

「お、いいねえ。たまにやゆつくり自然の中で、ってね」

結衣の提案に、なづきが一も二もなく賛成の声を上げた。彼女はここ数日、直属のリーダーが昼休み中なのにコピーを言いつける、とお冠だったのだ。

「乃里子も大丈夫でしょ？」

ぱつと髪を翻して結衣が微笑む。香りが広がる。

「ねえ、シャンプー何使ってる？」

「え？ ああ、えーつとね、こないだ変えたの。新製品、買っちゃった」

突然の流れに乗らない私の質問に面食らいながらも結衣は数度瞬きをしたかと思うとすぐに反応してくれる。なづきもだいぶ慣れたのか、「また？ 今度は何さ？」等と溜息をつく。

「私、止めとく」

小さな声で言ったのは、もし聞こえないようだったり聞き返されたりしたら再度繰り返さないことをわかつてのことだったと思う。その点、私はずるかった。

「あ、そお？ んじやなづき、十二時鳴ったら踊り場でね」

私のペースがわかつている結衣は、カルくそう答えた。いつもならそんな風に理解のある結衣のことを助かったと思うのだけど、今回は妙に理不尽な気持ちだった。

そしてやっと気付くのだ。自分から行かないことで、私は何かを偶然の所為にしたいのかもしれない、と。その理由を問い質される前に弁明しなければいけないのはわかっていたのに。

自ら赴くのではなくてあくまでも偶然に。そうでなければ、なんと説明したらいいだろう。

14：クレヨン

十二時のチャイムが鳴ったのを、私は意識的に無視していた。数分堪えて顔を上げると、もう結衣となづきの姿はない。というより、女性社員の姿なんてほとんどない。お弁当を買いに行つてしまっているか、近所の食堂へ走ったか、もしくは給湯室でくだらない噂話をしながらお茶を入れているか、だ。理不尽にも置いていかれたような気がする。

……何にだろう？

本当に感情つて嫌だ。あんなに息苦しいと思うあの場所に、私は同時に惹かれてもいたんだということに気付かないわけにいかなくて。わざとそれに気付こうとしなかった自分に嫌気が差す

とりあえず、コンビニに行こう。

エレベータホールでは沢山の人間がくだりエレベータを待っている。その間を縫ってホールを通り抜けると、その先の非常口の扉を押した。外にある非常階段は本当に時々しか使わなかったけれど――思いつかなかった。公園側だったなんて。

風の通る非常階段はピンク色の天井が今度はまるで絨毯のように見える。ここからじゃひとつひとつの花の形はわからない。ただ、ピンク色にぼんやりとその塊が見えるだけ。そうやって見た絨毯は天井として見上げるよりも儂く、息苦しさは感じない。

ああ、私って我俥だ。自分が後ろめたく思わないのであればあの桃色が綺麗だなんて思うのだから。

鉄製の手すりにもたれかかってそれを見下ろしていると、あの天井の下で覚えた息苦しさはどこへやら、仄かに柔らかな感情が沸き

起こる。

どうしてだろう。あの、小さな花たちが集まってその呼吸を揃えていそうな雰囲気よりも、どこかファンタジーチックな雰囲気だ。

「子供のお絵描きみたい、ね」

くすり微笑んで独り言を言う。事実、ふんわりと桃色のクレヨンで描かれたようなその景色は心を和ませる。どうしてだろう。

どのくらいそうしていたか、遠くでチャイムの音が聞こえた。

15：タイミンゲ

夕刻のチャイムが待ち遠しかった。お昼を食べ損ねていたけれど、不思議と空腹感はない。とにかく時計の針ばかりを睨んでいた。

いつもと同じ速さで長針は進み、そして何度めかの十二を差す。ずっと待っていたのに何故かびくりと肩を震わせ、そして手早く机の上の書類やらペンやらをざっと引き出しにしまいこむ。

「お先に」

結衣の髪がさらりと私を振り返り、微笑んで口元近くでヒラヒラと手を振った。なづきは……ガーガーと紙を吐き出すコピー機の前で軽く右手を挙げる。

今度はエレベーターに乗る。そしてエントランスを出たら右を選んで。あの桃色の塊に、私、今日ならまっすぐ見つめ返せるかもしれない。通り過ぎる人と同じように『綺麗だね』って言いながら見上げて微笑むことが出来るかもしれない。

無意識に小走りになっている。遠目に見える桃色はまだ小さくて、昼間に見下ろしたあの儚いイメージのままだ。

わざと視線を伏せ気味にして、私は公園へと入った。視線のすみにちらちらと桃色が見える。それでもずんずんと進み、人通りの少ない通りへと足を進めた。

私は期待していたのだ。あんな風に儚く見えた桃色はきつと、同じように私を柔らかく包むだろう、と。

上げた視線の先は、変わらない、咲くことに誇りを持った小さな花たちが肩を寄せ合うように私を見下ろしていた。何か喉に詰まったような息苦しさと一緒に感じる妬ましさと悔しさと、そしてこ

み上げる寂寥感に、視線を外せないまま私はじっと見上げて、そして。

まさに涙が零れそうだったその一瞬前に、私の視界で風が揺れた。涙の粒よりも先にはらりと、桃色の破片が、零れた。

16：ジェラシー

桃色の粒が私を打っていく。頬や髪や手に、その存在を儚く打ちつけていく。風が私の髪を撫でながら過ぎ、そしてそこから一拍置いて今度はピンクの天井が大きくそれを揺らした。

——泣いている。自分も、この桃色の天井も。そう思った瞬間、胸につかえていたような何かがすつと落ちたような気がした。押し潰されそうな後ろめたさも、寂寥感もなかった。ただ、同じように涙を流しているんだと思うだけで。

風が止むと天井はその揺らぎを止めたけれど、時折溢れるそれを我慢できないかのようにぼろりと涙を零した。

「……ごめん、ね」

誰に、何を謝っているのかわからないけれど、私の唇はそう動いていた。何故だか、零れていくピンク色の涙を抱きしめたかった。風に揺れて零す涙の粒をてのひらに数枚受けると、私はそっとそれを包む。花びらは欠けて、茶色に変色しているものもあったけれどその小さな破綻が逆にいとおしさを増した。

「なんで、泣いてる？」

唐突なその問いに、私はそのままゆっくりと声の主を見る。不思議と驚いたということはなかった。期待はしていたけれど、まさか。てのひらを包んだかたちのままで私はその手を胸に当て、微笑かに微笑んだ——つもりだった。自分が泣いていることにすら、気付か

なかったから。

「涙、みたいだね」

私の言葉に彼は、眩しそうに目を細めて天井を見上げる。

「そうだな。泣いてるみたいだ」

その視線がいとおしそうで、一瞬私は不可解な感情を抱いた。

まさか……嫉妬、してる？ 花を相手に？

迷うように伏せた視線を彼がどう思ったのかはわからない。ただ、恐らくその視線は私にあったと思う。それはただ私がそう感じるだけで、事実ではないのかもしれない。けれど。

「あんたも、泣いてる。桜と同じように……泣いてる」

声は低かったけれど真っ直ぐに心に差し込んでくる。

泣いている。私。桜と同じように。——同じように。そこで初めて、自分が涙を零していることに気がついて、そっと目尻を拭いた。

「なんで？ なんで、泣く？」

潤んだ瞳が真っ直ぐに彼の視線とぶつかった。どこか痛ましげな表情を浮かべて、彼は私を見ている。てのひらがゆっくりと力を失って、私の胸からピンク色の涙が零れて落ちていった。

17：ファーストインパクト

「……理由、要るかな」

たつぷり見つめ合ったあと、零れたのはそんな言葉だった。彼はその声が届かなかったかのように微動だにしない。

「ううん。言わなきゃ、いけないかな。言葉にしたら——」

頭を微かに左右に振って、自分の言葉を一度打ち消して私は一度そこで眼を伏せた。言おうとした言葉を舌に乗せるのに刹那、躊躇う。それでも、込み上げてくる言葉の方が強かった。

「何か——崩れてしまいそうな気がする」

そう言って視線を上げると、変わらない彼の表情にぶつかった。彼の唇はそこからゆっくりと動く。

「崩したく……ないのか？」

意外な問いかけに一瞬、言葉に……いや、思考に詰まる。私は崩したくないのだろうか？——いや、何を崩したくないのだろうか？彼にはそれが、わかっているとしても言うのだろうか？

ふつと肩の力を抜いて、考える時間を作り出すために呟く。

「崩したく……ないのかも」

「怖いのか？」

すかさず、といったタイミングで彼の切り返しが心に刺さる。

怖いのか——？ 怖いのだろうか。何が？ 『何か』が崩れることが。今の絶妙なバランスの上に成り立っている関係が崩れることが。動いてしまうことで始まってしまう何かが？

「あなたは……怖くない？」

見返した瞳が、少し弱々しい光を発していることに私は勿論気づかなかった。だから彼がその眉を痛ましげに寄せた本当の理由にも気づかず、私の問に答えるのを逡巡したのかとだけ、単純に思っていた。

「俺も、怖いよ。怖い。だけど」

だから彼がそう口にしたときもその続きは……言い訳に近いものなのかと思っていた、から。だから私は、準備が出来ていなかった。何にも。

「だけど俺はあんたに、泣いてほしくない、から」

何かが崩れていくような気が、した。

18：ホウルド

胸に何かがつかえてしまって、一瞬、呼吸すら忘れてしまったかのように顔が熱くなってきた、やっと、私は深く呼吸を吸った。

「ありが——」

告げようとしたお礼の言葉は途中でふつつと切れる。

彼の温もりを感じていた。腕に。背中に。肩に。髪に頬に涙に。きゅつと縮みそうにその力に身体を委ねて、私は眼を閉じた。

すっぽりと温かく全身を包まれて、私はぬくぬくと幸せだった。

頭の前から爪先まで、温もりが駆けていくように。閉じていた瞳がじんわりと熱く、そこに憶えるのは涙の温もりなのか彼の温もりなのか。

「……ごめ——」

「待つて、このままで居て」

彼が我に返ったように掠れた声で言いかけて離れようとするのを、私は慌てて止めた。言葉だけじゃなく、離れようとする彼の腕を咄嗟に引き止める。

いや、引き止めるだけじゃなく、私は逆に彼の身体を抱き寄せた。彼は一瞬びくりと身体を震わせて、それでもしばしの間の後、腕にゆっくりと力を込めた。

彼の腕に、それまで欲望はなかった。けれど私が留めたあとで込めた力は欲望に似ていた。事実かどうかは彼にしかわからないけれど。

同じように感じる筈の温もりはどこか、心が見えなくなっていた。さっきまで柔らかいと思っていた彼の身体が妙に硬く、そして片腕

がゆっくりと背中を降りていく。

そのままだ揺すつてくれているだけでよかったのに、と私は言葉にならない声を発した。やはりそんなことは——ただ甘やかしてくれるだけなんて、贅沢な望みなのだろうか？ 半ば諦めの気持ちで私は、彼の胸に頬を押し付ける。まるで、イエスの返事のように。

しかし背中が私より強張ったらしい。途中で彼の手がぴたりと止まり、逡巡するように彼が顎を引いたのがわかった。表情を見られないようにと顔を埋める。傍から見ればそれは甘えた仕草に見えたかもしれない。

彼の視線を感じながら私はそのまま居た。そのうちにくすりと小さい笑みがある。その場の強張りを破り、彼の手はまた同じように背中に回される。

「大丈夫。大丈夫だから——震えなくていい」

トン、と叩かれた背中の腕は柔らかくて……本当にこのひとは私のことを言葉や理屈じゃない部分でわかってくれているのかもしれない、と思わせるのに充分だった。

19：キス

彼に抱きしめてもらっているのは、とても幸福だった。温かく優しく、包んでももらえている感覚。まるで守ってもらえているかのような。束の間、その時間を貪る。

ふと気付いたのは、私のことじゃなく彼のこと。さっきふと見えた衝動を彼はするりと押さえ込んだ。こんな風にしてもらっていないから彼にはそれを許さないことで私は、彼を利用しているのではないか。

そう思うと居た堪れない。自分が癒される為に他人を利用する自分の汚さに自己嫌悪が走る。下唇を噛んで俯き、その温かな胸を押し戻す。そして痛いぐらいの後悔と一緒に彼に背中を向けた。

「ありがと」

それだけ、素っ気無く残して。

「ちょ……！」

慌てたような声が背中では聞こえたと思うと、左手首がつかまれて足が止まる。

「……どした？」

「なんでもないの」

早口にそう否定する。

「……なんでもなくない、よな？」

「……………」

「どうした？」

一刻も早くそこから逃げ出したいくて、情けない自分を振り切りたくて私は顔を背けたまま頭を振る。思いのほか彼の力は強くて、そ

のまま手首から引つ張られ、抵抗するもほとんど齒が立たない。右手もつかまり、両腕をしつかと持たれたけれど……顔は上げられなかった。

情けなさど自己嫌悪とで涙が零れる。

「顔、上げる、よ」

彼が掠れたような声で言うけれど応えられず、私は黙ったままだった。

「顔、見せて」

重ねて言われた言葉に、少しだけ頭を振った。

——と。

いきなり左手首が自由になったかと思うと今度は無理矢理顎を上に向けられ、涙を隠そうとする動作さえも追いつかないまま——いきなり、唇が塞がれた。

咄嗟のことで一瞬動けず、我に返ったときには身体を引こうとする私を彼が強引に抱きしめていた時だった。

混乱する思考の中、冷静に考えようと肩の力を抜く。彼の腕が、私のその仕草を安堵と捉えたように緩くなった。

反射的に私は彼の腕を振り解く。唇が離れる。彼の目に後悔と欲望と謝罪の色が見える。涙もそのままに数歩あらずさって、違う、と言おうとするけれど声が出ない。

そのまま、振り返らずに駆けた。言えばよかった。言えなかった。そんな自分がまた情けなくて涙が溢れてくる。

ただ思うのは――嫌じゃなかった。それすら私は彼に伝えることが出来なくて。

20:ブレイクダウン

風邪で休みます、の電話は案外スムーズに受け入れられた。寝起きの声が風邪声に聞こえたらしい。

昨夜、どこをどう帰って来たのかわからない。気がついたら自分のアパートの前だった。あの公園から真っ直ぐ帰れば五十分で着く筈が、時計はゆうに三時間の経過を示していた。顔さえもろくに洗わずにベッドにもぐりこんで眠った。あの一瞬を思い出したくない。

でももう一方では彼の温もりを呼び起こそうとしている。嫌じゃなかった、ともう一度思い返す。彼の腕と唇と。

ごそごそとベッドを這い出してユニットバスにお湯を落とし始めると、まだ裸までしか溜まっていないお湯の中に蹲って膝を抱える。ざあざあというお湯の落ちる音だけが耳に響き、他の何もかもを消し去ってくれる。じんわりと温かい湯が確実に身体を温めてくれる。そんなことが嬉しくて膝に顔を埋め、深く溜息をついた。

いつもより多めに使ったシャンプーとボディースープで体中を泡だらけにすると少しだけ気持ちはずれた。どうせならバブルバスにすればよかった、とお湯を抜きながら考えた。

髪を簡単にタオルドライしたあとでお湯を沸かし、コーヒーを入れる。立ち上るその香りでまた少し、慰められる。

天気の良い平日に風呂に入り、洗濯もせずにぼんやりとコーヒーを飲んでいる自分が急に客観的に見えて私は苦笑した。

彼は……どうしているんだろう。逃げてしまった私が彼を傷つけていなければいいと願うばかりだ。あんな場面で逃げ出すなんて――

――随分臆病になったものだ。十代の若い女の子だってあのくらい。嫌じゃなかった、と思い出す。そして自分で自分をぎゅっと抱きしめてみる。自分の身体の温もりはわからない。彼を抱きしめた時は――とても温かった。そう、唇も。

結衣だったらきつと、『乃里子、その人に恋したの?』なんて言うんだろ。でもそう聞かれてノウと即答できる自信はなかった。返って言葉に詰まってしまうだろう、と思う。

じゃあ? じゃあ本当に私は彼に恋をしたのだろうか? 彼を好きなのか? 彼に欲情するのだろうか? その答えもまたノウだ。

雨戸のない窓は、カーテンの隙間から陽光をちらつかせる。彼はまたあの場所にいるんだろうか。もしいるのなら私は――彼に会いに行くのだろうか。

21: ポジティブ

昼間は親子連れが多い。小さな子の手を引いたお母さん。ベビーカーを押す親子。皆が口々に「綺麗ね」と褒めるその先はピンク色の天井だ。彼女たちは微笑んでる。柔らかに眼を細めて、その色の濃淡を楽しんでいる。

——あんな風に笑えたら。

多分あの反応が『ふつう』なのだろう。既に自分がそのカテゴリから逸脱しているのはわかってはいたけれど。それでも——誰かにわかって欲しいと思うのは我憊なんだろうか。彼が、理解してくれたいと思うのは傲慢なんだろうか。

遠巻きに桃色が見える場所に腰を下ろす。あの天井を見つめていると息が詰まるけれど、それを見て幸せそうに笑う彼女たちを見るのは幸福だ。誰かの笑顔。それを見つめているのが嬉しい。

しばらくそうして幸せそうな親子連れを眺めていてふと、思う。綺麗事だ。そりゃあ誰だって、誰もが笑顔でいるほうが幸せだろう。でも彼女たちのその笑顔は、いつでもそう在り得るのだろうか。あの瞬間だけでなく？

笑顔でいて欲しいと望むのは簡単だ。そして笑っていることも。けれど本当に大事なものは。

すつくと立って、周囲を見回す。あの姿はない。そうだ、約束なんかひとつもしなかった。彼がどこの誰かさえも知らない。もう一度会えるのかどうかさえ、だ。あんな風に帰ってきてしまっただけ、彼が二度と姿を現さなくてもおかしくはない。

けれど会いたい。もう一度会いたい。伝え切れていない言葉を彼に伝えたい。私の思いを、真っ直ぐに彼に伝えたい。それが『ふつう』でなくてもいい。私は私——そう、結衣がよく言ってくれた。『自然体でいいのよ。人よりも自分が心地いいのが大事でしょ？』

私は……彼と居て、自然体だった。彼がどうだかはわからないけれど、私は、彼と居たかった。もしも彼がそこで笑ってくれるのならそれに越したことはないけれど。

でもまずは、私は私自身が笑っていたい。『ふつう』で在ろうとしなくてもいい。今のままの私でいい。我侭でもいい。自分勝手でもいい。でも、私が自分で自分を幸せにしてあげられないのなら、他に誰に頼るのだ？

誰かの微笑がそこに居ていいと思えるような許諾だとするのなら……私はいつまでも居た堪れない気持ちでその誰かの笑顔が消えるのをびくびくしながら待っていないといけない。

彼の傍に、居たい。

22：チェリーピンク

「——くしゅん！」

「あらあ、風邪、まだ治ってないんじゃないの？ 大丈夫？」

食堂からの帰り道、結衣の綺麗に弧に描かれた眉がひそめられ、くるりと振り向いて覗き込むように首を傾げる。

「ん。平気」

「うつさないようにしてくれな、月末じゃ洒落にならん」

なづきはちらっとだけ振り返ると遠慮なくそう言い放つ。そんななづきに、結衣がくすりと笑む。

「あら、仕事ねっしーん。なづきっぱくはない発言ね」

「休みやそのあとのツケが怖いだけ。誰が！」

結局一日休んだあの日、彼には会えなかった。約束を交わしたわけじゃないから仕方ないといえば仕方ない。でも、桃色の天井の下でじっと待った数時間は確実に……嘘を真にしつつあった。

「昨日は一日寝ていたんでしょう？ 随分厄介な風邪ね、気をつけないと」

結衣が気遣うような素振りを見せる。曖昧に頷く私の視界が揺れて、突風が吹いた。

「った！」

なづきがいち早く悲鳴を上げる。そういえば彼女はコンタクトレンズ愛用者なのだった。強風の日は辛い、と以前零していたっけ。

「——あ」

長い髪が乱れないように押さえている結衣の肩に、桃色の欠片がぴたりと張り付いた。

「ん？ ……あら、桜の花びらね。公園から飛んできたのかしら」

私の微かな言葉に反応した結衣が、片目だけ開けてチラッと私を見て、それから肩に視線を移す。それを、同じような色のマニキュアを綺麗に塗った指でつまみあげて、ふうっとピンクの唇でそれを吹いた。

花びらは頼りなく結衣の指先から零れると、一瞬風に乗ってふわりと浮いて、それから——ゆっくり地面に落ちていく。

私、みたいだ。——そんな風に思う。捕まえられてそして一瞬浮かび上がって。そのあとはゆっくりと下り坂に——なるのだろうか。花びらは結局、地に落ちてしまうのだろうか。

「そろそろ桜も終わりね。明日のランチ、またお花見しに行きましようよ、ね？」

「風が強くなかったらね。ああ、あと乃里子の風邪が悪化してなかったら、か」

結衣となづきのそんな会話の後ろで私は、地に落ちた花びらを眺めていた。風に翻弄されて揺れ、落ち、汚れ。そのうち茶色に変色してしまうのだろう。——私の思いも？

23：フィジカル

翌日、確実に覚える頭痛を隠して私は出社した。休んでも良かったのだけれど言われるだろう嫌味と、なづきに任されるだろう休んだ分の仕事を思うとそうもいかない。

それに――認めるのはあまり気が進まなかったが、結衣がちらり言った花見の話が気にかかったのだ。

「乃里子、大丈夫なの？ 顔、赤いみたいだけど？」

「ん、平気。どうせ今日来れば週末だし」

結衣が覗き込むように私を見るのに頷いて答える。公園の桜は風がなくとも、時々さらりと撫でる風圧だけではらはらと涙を流していた。

「風情あつていいわね」

桜並木を嬉しそうに両手を広げてくると回る結衣に吹雪が被って、本当にそのまま消えてしまいそうなほど美しかった。

「満開のときの方が見甲斐があつてあたしは好きだけだね」

なづきが眩しそうに眼を細めて続け、結衣は不満そうに唇を尖らせる。そんな二人のやり取りを眺めながら私は彼を探していた。

「あ、あそこ空いてる！ ラッキ」

結衣がいち早く指差して駆けて行く。ちょうどテニスコートが見える位置のベンチから結衣が手を振った。一瞬どきりとしたのは、テニスをしていた団体が彼を思い出させたからだ。そういえば彼が何をしている人が聞いたことがなかったけれど、雰囲気からして大学生だろう。もしかしたらこんなグループの中で楽しくやっているのかもしれない。

「なあに乃里子、年下に目覚めたの？」

じつとコートを見つめていた私に気付いて、からかうような口調で結衣がくすつと笑う。それを横目で眺めてなづきが口を挟んだ。

「人のこと言えないんじゃない、結衣？」

「えー、大学生なんて子供じゃない。パスパス、どうせ一時の気の迷いとかなのよ、あの年代の男の子って」

どきりと、した。

「ほお、随分確信持つて言うねえ。さては痛い目を見たか」

ははははは、と高く笑うなづきに結衣が膨れる。

「気の迷いなの？」

私のいきなりの問いにやっぱりなづきは眼を瞬かせ、結衣はニコ、と笑って耳元に唇を寄せた。

「ていうかね、あの年頃の男の子はどうしても、感情より肉体に走りがちなのよね」

囁き声はなづきにも勿論聞こえていて、彼女は呆れたように嘆息する。結衣は勿論それに気付いてんべ、と可愛く舌を出した。

24：テニスコート

「ええと……肉体の方に興味があるってこと？」

「ん、まあ、そーいうコトかな」

結衣が茶色の綺麗な髪をかきあげながら言う。なづきは既に聞かないフリをしていた。

「好きだ、って感情を欲情によって錯覚しちゃうのよ。仕方ないことなだけどね」

につこりと唇のピンクが弧を描いて頷いた。

彼の瞳には確かに欲情の色はあった。腕に込められた力も。ぎゅっと抱きしめられた温もりはそれがベースだったのだろうか？ 欲情するのは仕方のないこと、なのだろうか？ 触れればやはりそうなってしまう？

「……たくあんたち、ランチといっしょにする話題じゃないやね」

溜息をついてジロリとなづきが軽く睨む。

「あらあだって、大事なことよ？ そんな男に引っかけたら大変なもの」

「結衣じゃあるまいし、乃里子に限ってその心配はないとあたしや思っけどね」

「……かも」

「え？」

結衣となづきが同時にそう言って私を振り返る。真っ直ぐに目の前のテニスコートを見つめたまま、もう一度、今度は少しはつきりとした声音で言った。

「引つかかった、かも」

ふたりが眼を合わせてきよとしたのが手にとるようにわかる。そしてやっぱりと言うべきかと言うべきか、先に我に返ったのは結衣だった。

「えー……と、乃里子、引つかかったって言うのは、男に？」

「ちよつ、ゆ……！」

「なづきは黙ってて！ 引つかかったの？ そういう男に？ 凄い剣幕でなづきを黙らせると、優しい声で結衣が重ねて聞いくる。

……どうなんだろう。彼は『そういう男』なんだろうか。確かに私は彼のことを何も知らない。名前も歳も、何をしている人でどこに住んでいるのかさえ。私の思いを理解してくれていたかもしれないということ以外は、何ひとつわからない。

「わかんない。そんな人じゃないと思う」

結衣の質問に曖昧に答えを拒否しながら、私はテニスコートから眼を逸らした。彼にダブって見える彼らが眩しかったのと――結衣となづきをまっすぐ見られなかった。何故か。

25：ディオール

「で、乃里子」

結衣が居住まいを正して私に向き直る。その向こう、なづきは既に戦線離脱を決め込んで我関せず、まっすぐテニスコートを見ていた。

「その男、どこの誰なの？」

「え……っと……？」

「名前は？ 幾つ？ 何してる人？」

立て続けの結衣の質問に眼を瞬かせながらも私は答えた。――いや、結衣にとつては答えになっていなかったけれど。

「名前……知らない。たぶん年下だと思っただけ。学生……？」

「乃里子、あなた……」

結衣が大きな瞳をもっと見開いて、続けた。

「まさかどこの誰ともわかんないような男と？！ 何でそんな迂闊なこと――！」

「キスするのは、迂闊なこと？」

……多分。結衣が考えてることと実際私が言おうとしている彼とのかかわりは大きく違うだろう。

「キスした、だけ？」

「抱きしめられた」

「……で？」

「それだけ」

はぁ、と結衣が溜息をつく。その向こう隣のなづきは呆れたような視線を結衣に送っている。きつとなづきにもわかったんだろう、結衣の考えてることが。

「えーと……乃里子」

「うん？」

「……それ以上、は？」

いきなり抱きしめられてキスされて、それに驚いて逃げてきてしまったなんて——だけどその彼の行為が全然嫌じゃなかったただなんてこと、言えない。言いたくない。

俯いた私の様子を見て結衣は『言いたくないらしい』というところまでは私の気持ちを感じ取ってくれたものの、『どうやらそれ以上されたいらしい』と違う方向に勘違いをしたようだった。

「乃里子、あなたも気をつけないと。そりゃあ男のほうが力もあるしいざってときに抵抗は出来ないけれど……でもね、そういう男についてった乃里子も乃里子よ？」

結衣の勘違いを訂正しようかと口を開きかけたき、目の前のテニス軍団がざわざわとコートを出て来る。それをきっかけになづきが立ち上がり、私たちを見下ろした。

「とりあえず、そろそろ戻りませんかね、お嬢さん方。続きは夜、つてのはどうさ？」

同意して立ち上がった私の右腕がふわりと結衣の左手に取られる。腕に絡まった細い腕と、香った甘いデイオールの香りにふと、欲情ってこういうことだろうか、と考えた。

「あまり深入りしちゃう駄目よ？　ね？」

耳元でそう囁いて、ピンクの唇はにっこりと笑う。

26：カンパリソーダ

アルコールで湿ったピンクの唇は、昼間よりもさらに滑らかに緩やかに動いた。なづきは好みの白ワインをもうすぐひとりで空けそうな勢いにもかかわらず全く顔色が変わらない。ついでに態度もだ。話題の内容についてはさすがに夜のほうがその許容範囲は広いらしい。

「ちよつとお、乃里子、聞いてる？」

ほんのり赤くなった頬は色っぽい。結衣が男にもてるのもわかる気がする。

「聞いてるよ」

「んじゃあ続けるけどお……つまりはね、もつと相手を良く知ることが大事なのよねーえ」

「あー、もう、お前さん酒は駄目！ 水にしなさい水に！」

さすがにグラスを取り上げたなづきが呆れたように溜息をつく。

お水なんて嫌だ、美味しくないと毒づく結衣がバーテンダーに頼んだバックス・フィズのあとから、なづきがわざわざ「シャンパン抜きで」と付け加えた。

「でもお……結局、乃里子自身はどうなわけえ？」

オレンジ色のグラスを掲げて結衣がちらりと流し目を寄越す。どきりとしたのを隠そうとして、グラスをぐくんと飲み干した。カンパリの苦味が広がる。

「乃里子がネ、その男のコト満更じゃないって言うんならあ……いいのかなあ？ あら？」

「……つともう、言ってることわかってんのかね」

なづきが溜息をついて、目線で『ねえ？』と訊ねる。眼を伏せた私の手の中、空のグラスがかりりと氷とぶつかる音を立てた。

「……よく、わからないの」

それが正直な気持ちでもあった。もしも——彼の興味が結衣の言うように肉体へのものだったとしたら……というより、その傾向が強いような気がしていた。

あの時、私の背中に回された腕は確実にその欲望を持っていた、と感じた。感じたからこそ私は彼を拒絶したんだ。彼を、というよりは彼が抱いた欲望を。

「んじゃ、答えは簡単よ、乃里子」

オレンジジュースはもう半分に減っている。アルコール抜きであることを知ってか知らずか、結衣は特になづきに文句を言うわけでもなかった。

あまり定かにならない視線がぴたりと私に止まる。

「もう一度その男と会った方がいいわ。そうじゃなきゃ、きっぱり忘れることね」

もしかしたら結衣は傍で見ているほど酔っていないのかもしれない、とそのときふと思った。

27：ブラックコーヒー

結衣に言われた言葉を、私はそれから数日ずっと反芻している。もう一度会ったほうがいい、と結衣は言った。——けれど、どうやって？ 私たちはお互い名前も連絡先も知らない。あの公園で偶然に任せて会っただけだ。そう、たった三回会っただけ。

その事実を私を軽く打ちのめした。三回会っただけの人間。名前も知らない。どこに住んで何をしているのかも。そんな相手が忘れられないなんておかしいかもしれない。

結衣はあれきり、私に言った科白なんて忘れてしまったかのようにいつもどおりだ。結衣にとってはもしかしたら普通のことなのかもしれない。

なづきは翌週、「随分酔っ払ってたね、おふたりさん」と苦笑気味に言っただけ。そんな彼女に結衣が言ったことを覚えているかと問うのは憚られた。なづきは敢然たる現実主義者だからだ。

「おや珍しい、残業？」

デスクで書類を触るのに飽きが来て、うろつろと給湯室を通りかかるとなづきに声をかけられる。愛用の黒いマグカップの中はブラックコーヒー。香りが立ち込めている。

「うん、ちよつと昼間ミスっちゃって」

黙って私のマグを取り出してインスタントコーヒーをいれて手渡してくれる。受け取ってポットのお湯を注ぎながら答えると、タイミングよく牛乳のパックも差し出される。——こういうところ、なづきはよく気がつくんだ。

「今日はいいい」

「へえ。悩んでるワケ？」

ストリートに指摘されて、私は答えずにコーヒーを嚙る。口内に苦味が広がって眉を顰める私を見て、パックを冷蔵庫に戻しながらなづきが笑う。

「あんだ、悩んでるとブラックで飲んでる」

「……そう？」

「そーオ」

しばらく流し台に寄りかかってマグを見つめると、なづきが軽く訊ねる。

「何、こないだ結衣が言ってたコト？」

「……」

「コーヒー、苦い。」

「あれは結衣の考え方だからね、そいつをなぞるかどうかはお前さん次第だよ」

「なづきなら？」

眼をあげてなづきを見ると、彼女はにやりと笑ってマグの中身を飲み干した。そしてカップを手早く洗いながら答えてくれる。

「あたしなら、とか結衣なら、は関係ないっしょ。要はあんだが——乃里子がどーするか、ってコト」

「でも、普通なら……」

「普通？ 普通って何さ？」

マグを洗い上げ、手を拭きつつなづきが鋭く切り返す。

28：マール

普通、なら。結衣なら。なづきなら。……私なら？

カップを手にして考え込んでしまった私に、なづきが溜息をついた。

「会ってみたら？」

妙に、声が優しい。

冷めてる風を装ってるけど、なづきはこんなとき放つとけないタイプだ。仕事でもそれが出て、時々自分の仕事以外のフォローでいっぱいになったときがある。損をすることも多いって嘆くけど、私はそんななづきが好きだ。

「結衣が言ったから、とかじゃなくてさ。あんたが自分の気持ちにケリつけんのに、必要なんじゃないの？」

「……そう、なのかな」

「そうじゃなかったら、なんでそんなに気にするのさ？」

やっぱり、コーヒー、苦い。

なづきの言うことはいちいち正論だ。というより、彼女がなにか意見めいたことを言うときはよほどのときで、そしていつもそれは的を射ている。普段飄々としているのはその鋭い爪を隠すためなんじゃないかと思えるほどに。

「図星か」

ふつつと溜息と一緒に小さな声が漏れる。それからもう一度牛乳のパックを取り出して、無言で私の手のマグカップの中に注いだ。真っ黒な液体がマールになって、それから淡い綺麗なカフェオレカラーになる。

「答えは出てるじゃないか」

カップの中を覗き込んでいる私になづきが言い、視線を上げて彼女を見るとニヤリ、笑った。そしてぱたん、と冷蔵庫のドアが閉じる音と一緒に、私の頭になづきの手がぽんぽんと二回、置かれた。

「さ、残りの伝票さつさと片付けて帰ろ」

給湯室を出て行くなづきの背中に、届かない「うん」という返事を返しておいてもう一度カップの中を見つめる。

黒は鋭く私を見返したけれど、牛乳の混ざった色は優しく笑っているように見える。喉を通して胃に向かう液体は温かく、ほわりと包んでくれるような気がした。

会ってみる？ 彼に。

何もかもに答えを見出すのなら、彼にもう一度会ってみなければ。ひとりで考えていても、見えるものも見えなくなってしまう。

……明日、公園に行ってみよう。桃色はもうはらはらと残り少ない涙を零すだけだけれど、彼に会えるとしたらあそこしか、ない。

29：タイムアップ

定時少し前から時計を気にし始めていた。ちらちらと視線は窓の外。緑の中で桃色が僅かに揺れている。頼まれたコピーはあともう少し。これが終われば、帰れる。

「あら」

のろいコピー機の前でじいつと見つめてる私の傍を、結衣が通りかかった。

「残業になりそ？」

「……ん、少しだけ」

「そオ、かあ」

なにやら考える風に立ち止まった結衣は、「うん！」と言うと持っていた書類をコピー機の上にどさり、置く。

「……？」

「あたしがやったげる」

「は？」

結衣がそんなことを言い出すのは初めてだった。付き合いは長いけれど――なづきなら良くそう言っ、こなしきれない分を引き受けてくれたことはあったけれど。

「いーから。綴じて部長に渡しとけばいいんでしょ？ オツケー」

「あの……」

「ホラホラ、もう定時じゃない。帰った帰った」

ひらひらと綺麗にマニキュアの塗られた手が翻る。ブルーのマスカラーで彩られた瞳がウィンクをする。……なんだろう。さすがに結衣の考えていることがわからなくて、私はじつと彼女を見上げる。その視線の先で結衣は微かに鼻歌なんぞを歌ってコピー機でリズムを取っている。

「なにか、あったの？」

「なあんにもないわよオ。ホラ、早く帰りなさいって！——ああ、そう」

もう一度ひらひらと手を振ったあと、結衣は私の耳元に唇を近づける。ミス・ディオールが香水がふわんと香る。

「公園の桜、そろそろ終わっちゃうのよ？」

それだけ言つと、にこりと笑った。

よく、わからないけど。でも今日は甘えてしまおう。早く——早く、行きたい。

「ありがと、結衣」

「いつてらっしゃーい」

妙に上機嫌な結衣に送り出される状態で、私はそそくさと会社をあとにする。

はらはらと僅かな花びらが舞う公園。息苦しいほどの圧迫感はないけれど、それでも胸が締め付けられる。泣きそうになるのを堪えながら、私は奥の方へと足を進めていった。

30：シャツフル

結衣の言っていたとおり、桃色の天井はその多くを緑に明け渡していた。

緑と桃色つて、なんでこんなに印象が違うんだろう。そのひとつひとつの大きさは変わらないのに。公園の中ですれ違う人は大抵がそのわずかな桃色を惜しむように見上げている。

はらり、と天井からその桃色が役目を終えて舞い降りてくる。いや、どちらかというと力尽きて落ちてきたという方が合っているような気がする——すこし、マイナス思考なのかもしれない。自嘲気味にわずかに口元だけで笑うと、私は公園の奥へと急いだ。

数週間前はこの辺りで花を愛でていた人ばかりも今日はほとんどない。……どうして桃色は愛でるのに、緑はそうじゃないんだろう。そしてどうして、桃色のときだけあの、胸が一杯になるようなむせ返るほどの息苦しさを覚えるのだろう。

でも、今日は、その圧迫するような感覚と一緒にわずかにちりちりするような、複雑な思いが浮かんでくるのを無視できなかった。

……彼を探してるから？ 彼に会いたいから？ 何故彼に会いたいかの理由がわからないから？ 彼に会って自分が何を言うのか何を言いたいのか、わからないから？ ——たぶん全部が、当たりだ。

足が自然と速くなる。視線はちらちらと落ち着かない。彼らしき姿を見つけると一瞬足が止まり、そして違っていることに安堵しつつがっかりする。しかし確実にそれが近づいていることは、わかっていた。

何故だかはわからないけれど。そして本当に彼が今日この時間ここにいるのかどうかもわからないけれど。

でも、確信だけはどんどん強くなっていく。その先を左に曲がれば。そうだ、きつと彼はそこに居るだろう。桃色と緑にまみれた木に寄りかかってきつと、眼を細めて天井を見上げているだろう。

はらりとまた、花びらが頬を掠める。桃色の涙がぽろりと零れる。見上げれば、またわずかにはらりはらりと涙粒が舞っている。哀しみの涙なのか、それともつと別の感情に基づくそれなのか——私には、わからない。けれどもその上で青々と色づいている緑は、きつと涙など零さないだろうと予感させるほどに力強い。

ザッと、足元の砂利が音を立てる。

その音に自分でドキリとしたけれど——その向こうで、天井を見上げていた双眸がまっすぐに私を、捉えた。

31：ハゲ

眼が合った瞬間、心臓がどきつとした。彼と会っていて初めてのこと。

顔に出なかつただろうか？ 僅かに頬が熱くなるようなそんな感情が胸の奥から込み上げてくる。

なんだろう、おかしい。

「――桜」

「え」

彼が先に私から眼を逸らして、また天井を見上げる。つられるように私も、視線を上げた。

「もう、散っちゃうな」

「――うん」

ドギマギしている自分が、まるで自分じゃないみたいだ。

こんな――こんなのであんまり好きじゃない。いつもどおりに。そう、いつもと同じように。

「苦しく、ない？」

彼の視線を感じると、私の心臓は跳ねる。そんな法則になってしまっているかのように、抑え切れない。

「苦しく――？」

「そう。いつも、苦しそうだったから」

僅かに眉を寄せたのは何を思ったのだろう。私は彼の一拳手一投足ばかりが気になって、何を言われているのか、理解するのが遅くなる。その反応を彼がどう思ったのか、ふと背を預けていた木から私の方へと足早に近づいてきて――

「泣くな」

そのまま、私を抱きしめる。

突然の彼の行動に、私は何も言えずにただ抱かれていた。心臓は変わりなく跳ねている。彼に伝わってしまうんじゃないかというほどに。

きつと泣きそうな顔になってしまったんだろう、と冷静な私が頭の隅で考えていた。そうじゃないと伝えなければ、と思う。

そうだ、この間も私は結局何も言えなかった。本当の自分の気持ちを何も、彼に言えずにただ逃げ出してしまった。思いは、きちんと言葉にしなければ伝わらないのだ。

彼の腕は強くて、最初の驚きが去ったあとは心地良いものに変わっている。私が心地良いのだ、ということを彼に伝えたい。

「——待つ……て」

やっとそれだけを言うと、彼の腕がびくりと震えて緩んだ。そして明らかに後悔の思いが刻まれた表情を隠せずに、彼が私から離れる。

「……ごめん」

「——違う」

おずおずと、私は心を言葉に紡ぎだそうとし始める。

32：フアクター

彼を見上げると、戸惑いを宿した目が一瞬私のそれとぶつかったかと思うと、すぐに逸らされた。頬が赤く染まっているのは何故だろう。

「違うの」

今の苦しさは、あの桃色の天井のせいではない。そして彼の腕のせいでもない。強いて言えば私の心の持ちようなのだ。それを彼に——どう言ったら、伝わるのだろう。

「あのさ、俺……」

私の言葉を待たずに、彼はおずおずと切り出した。しかし、目が合わない。そわそわとした仕草は今までになく不安を募らせる。

「俺……あんたに、会いたかった」

彼が目を逸らしていてくれてよかったと、私はその時思った。自分でもわかるくらいに耳が、熱い。その理由は自分でもわかつている。

「あんたに会いたかった。あんたを守ってやりたかった。あんたを泣かせたくなかった。だけど俺、こないだみたいなこと——」

彼は一気に続け、そこでふつと言葉を途切らせる。彼の言う『こないだみたいなこと』が何を指すのか、私は正確に捉えたつもりでいた。だって私もずっと、そのことを考えていたのだから。

私が顔をあげると、彼は眼を閉じて大きく肩で呼吸を整えていた。

「こないだみたいなこと、いきなりすんのは、良くないと思う。ごめん。悪かった」

彼はそう続けると、子供みたいにびよこんと頭を下げた。私は彼

のつむじを眺めながら、なぜか温かい気持ちになっているのを否めない。

「ひとつ、質問と、それから、伝えたいことがあるの」

私がゆっくりとそう言うと、彼は頭をあげてまっすぐに私を見る。酷く真面目なその表情は、どこか怒っているようにも見えるけれど、彼はそのままゆっくり頷いた。

「——身体の方に興味がある、っていうこと？」

私の質問に、彼は目をまん丸くさせて数回瞬きを繰り返すと、目を逸らして口元を手で蔽い隠した。

33：リフレイン

目を逸らしたままの彼の頬がみるみる赤く染まっていくなを私は見ていた。そんな私の視線を気にするように、彼は一層目を逸らしたままで「あの……」と呟く。

言い淀みながらそう言うのと、彼は語尾を濁して顔を赤く染めたまま、再び口ごもる。

「あの俺、そういう男に見られてた……？」

口元だけではなく顔全体を掌にうずめて彼は小さな声で言った。

「そういう男？」

私の質問に、彼はますます黙ってしまふ。しばらく掌に埋めていた顔を上げた彼は、赤く染まった頬のままで顎をあげた。

「あんたを守りたかったから。——それだと、答えにならないか？」

「私を、守りたかった」

咄嗟に彼の言葉をおうむ返しに繰り返すと、彼は一瞬ぐくりと喉を鳴らす。そしてゆっくり頷いた。

「抱きしめることであんたを守れるかどうかはわからないけど、ただ、俺があんたを守りたいと思ってるってことを、示したかった。」

——でもそれ、言葉で言えば良かった。いきなり抱きしめんのは……失礼だよな。ごめん」

そして彼はもう一度、頭を下げる。

私は、彼が今言った言葉を頭の中で繰り返していた。守りたいと思っていることを、伝えたかった——守る。抱きしめる。結衣の言葉も思い出す。親愛の情。あなたを好ましく思っています。

彼がそつと頭をあげた。恥ずかしげに私を見るその表情に、私は無意識に手が伸びていた。

ねえ結衣、親愛の情って——勝手に溢れるものなのかな？

私は彼の首に手をまわし、そしてそつと抱きついて、抱きしめた。胸の中には結衣が言ったような親愛の情と、そして彼が言ったような守りたい気持ち——私は、彼を守ってあげたいというその思いが混ざったあたたかな思いでいっぱいだった。

首に回す腕に力がこもる。彼の耳が私の口元すぐそばにある。そうだ、もうひとつ、伝えたいことを。

「私——嫌じゃなかった」

34：ティアドロップ

彼の腕がそつと、私の背中に回る。その腕は少しずつ力が込められるのがわかる。伝わってくる。

「……本当に？」

震えるような声で彼が訊ねた。私は彼の腕の中で小さく頷く。それを感じた彼の腕がまた、力強く私を抱きしめた。

「本当に……？」

信じられないというように、彼が同じ質問を繰り返した。私は今度はもう少しはつきりと頷いてみる。それが伝わったのか、彼がぎゅっと腕に力を込めた。

身体中が彼を感じていた。あつたかくて、そして優しくて——強い。鉄骨のような剛健な強さじゃなくて、しなやかな、薄い鋼のような強さを感じていた。

どのくらい、そうやって抱き合っていたのか、彼はゆっくり抱擁を解く。そして私の両腕をそつと掴んで、彼は私の顔を覗き込むようにして、呟く。

「俺——あんたのこと」

「待って」

彼の言葉を遮って、私は彼を見上げた。真摯な瞳が私を見つめている。あの夜に感じた欲望の欠片は見えなかった。

私は自分の右手をそつと自分の左胸に置き、そして彼の左胸に触れた。

「わかってる」

「……うん」

伝えたい思いはわかっている。私が何を感じているのか、私が何を伝えたいのか、言葉にしくても彼は気持ちを感じてくれる人だ。むしろ言葉にしてしまうと、気持ちと言葉の間の何かが零れ落ちて

しまいそうに思う。

だからいいのだ。今の抱擁で私たちは確実に何かの感情を交換したのを、わかっている。それで今は充分過ぎるくらいに彼の気持ちに気がついていて。きっとそれは、彼も同じはずだということも。

35：ハッピーエンド

「けどさ」

彼はちよつと笑つて、私の腕をつかむ手を緩めた。照れくさそうな笑みだった。

「一度だけ、言葉にしてみたい」

彼の手が、私の頬に触れた。赤く染まっていた頬はまだそのままだけれど、彼の瞳は優しい。私が頷くと、彼は目元だけで微笑する。

「——あんたのこと、好きだ」

私は眼を閉じて、その言葉がまるで慈雨のように身体中に沁み込むのを感じていた。じんわりと温かくなっていく私の思いはじわりと目尻から溢れ、涙の形で頬に零れていく。

その涙の意味は——彼にも、わかつている筈だ。その証拠に、私が泣いていることに彼は一言も触れなかった。

「好きだ」

彼が、短い言葉でもう一度、続けた。

私は眼を開けて彼を見つめて、そして僅かに微笑んだ。受け止めました、の合図は確実に彼に伝わって、赤く染めた頬のまま、彼はくすりと笑う。

「なあに」

「いや」

問いかけると彼は首を振る。それでもなお彼をじっと見上げてい

ると、しばらくはその視線に耐えていたものの……諦めたかのように何度か首を縦に振る。

「幸せだ、と思ったの。俺、幸せだって今、実感した」

照れくさそうにしながらそう言っていると、彼はいきなり私に抱きついた。

「ちょ……」

「ありがとう」

切ない声で、彼はそう言った。『ありがとう』。その一言にどれだけの意味があるか、私は心で感じていた。きっと、言葉にしてしまふと儚く消えてしまふ。言葉として奪われてしまふ。

それでも、私の喉にこみ上げてくる。それは思いであり、願ひであり、そして——たぶん、私自身、だ。

私の耳元で囁いた彼に、私は同じように笑って、彼を抱きしめ、そして喉元に溢れる思いを同じ言葉で紡ぐ。

「ありがとう」

35：ハッピーエンド（後書き）

無事、完結いたしました。

読了いただいた皆さま、ありがとうございました。

既にお気づきの方が多くとは思いますが、当作は「闇夜の桜」という別作品と表裏一体となっております。「闇夜の桜」は高瀬視点でのお話となりますので、ご興味がありましたらそちらも合わせてお楽しみください。

乃里子はちよつと変わった思考・言動をする子で、彼女自身、自分がマイノリティであることを自覚しています。

それ故に人と違うことが乃里子にとってはストレスでありながら、今では最初から「理解されることなんて無理なんだ」と思い込んでいるところがあり、それが劣等感を引き起こしてはいるものの、結衣やなづきといった理解者のおかげで自分らしさを失くさないように、と思い直せていると思います。

高瀬との出逢いは偶然ですが必然であり、乃里子はおそらく初めて、言葉だけではなく気持ち同士が交流出来ることを——受け止めてくれる人がいることを知って、かなり救われたのだと思います。

少数派であることで生きにくかったり、伝わりにくかったり、疎外されがちであったり——そういう状況にある乃里子が、高瀬という理解者を得て自分の存在を自分で肯定出来たという、ちよつとメンタリティ方面に傾倒したテーマをこっそりと隠していたので、きちんと伝わるように書けたかどうか、非常に不安ではありました。

しかしながら、毎日のように通ってくださったEiwingさまには本当に助けられ、励まされ、勇気づけられました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

出来ればスピンオフを書きたい、と思っております。ネタ的には結

衣あたりを主人公に出来たらとぼんやり考えておりますが、もしも
た皆さまのお目に触れるような機会があれば幸いです。

香住

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0996h/>

桜色の闇

2010年11月5日13時22分発行